

人間の精神的交通（Verkehr）に対する一考察

東方 沙由理（東京農工大学・博士課程）

今世紀における世界共通の課題は経済問題と環境問題にあると思われる。周知の通り、これは表裏一体の問題であり、それらを両立する形として持続可能型社会、循環型社会への転換が求められている。あるいは、人間が自然と調和した関係や他の生物との共生を視野に入れた共生社会、人間相互の共生をも含めた共生共同社会というものも提案されてきている。どちらにしろ、私たちは有限な地球環境の中で生き抜いていかなければならないことは疑いようもない事実である。

新たな社会の形態を展望するにあたり、2つの課題があるように思われる。1つは経済活動のあり方の再考であり、もう1つは共生を念頭に置いた上での、人や自然との関係性についてである。これはすなわち、自然との良好な関係を保った上での労働（生産や消費）のあり方や人間関係（社会）のあり方とはいったいどういうものかという問題として言い換えることができるだろう。

その問いに有力な手がかりを提示してくれるのが初期のマルクスである。マルクスの初期の著作には、疎外された労働といった視点から人間の本来の労働に関する考察や、その労働の中に内在する人間と自然との関係が含まれており、またそういった要素を含んだ生産物の関係を示唆するような言葉（交通（Verkehr））が見られる。前者の人間の労働という側面を主張する論者は数多いが、後者の精神的な要素を含んだ交通概念については、その語の使い方や概念の曖昧さゆえに、前者に比べればその論者は少ない。

そこで本発表では、後者の交通という概念に焦点を当て、自己を対象化した生産物の交通が、人間にとっていかなる意味をもたらすのかを探ってみたい。なぜこのような点に着目するのかというと、これからの経済活動のあり方として、今までの大量生産・大量消費といった量を中心とした商品の生産から、各条件や要望・機能などを兼ね備えた生産物への重視、あるいはその生産物がもっている内容を重視するといった、商品から生産物への質的転換が求められていると思われるからである。

では生産物が価値あるものだと認められるために必要な要素とは何だろうか。それは質的なものに価値を認めるような社会関係や交通関係、すなわち生産者と消費者の生産物に求める相互関係が根底に存在しなければならないと考えている。またそういった質を重視する相互関係が回復することによって、結果的に人間本来の労働の回復へと導いてくれるのではないかという期待も含んでいる。

また、人間に特有な交通概念への着目は、人間相互の共生のあり方や自然との共生のあり方の考察へと展開できるのではないか。そこで、本発表では生産物を通じた人間相互の交通がどのような社会関係を創り出すものなのかを明らかにしたい。